

主論文の要旨

Optimizing the indications for local ablation in the treatment of colorectal liver metastasis according to recurrence at the ablation site

(局所制御能からみた大腸癌肝転移における熱凝固療法至適病変の検討)

東京女子医科大学 外科学 (第二) 教室

(主任：亀岡信悟教授)

天野 久仁彦

東京女子医科大学雑誌 84 巻臨時増刊 3 号 E342 頁～E350 頁 (平成 26 年 11 月 30 日発行) に掲載

【目的】

大腸癌肝転移に対する熱凝固療法の至適病変は充分明確にされていない。今回、大腸癌肝転移治療における熱凝固療法の至適病変について検討する。

【対象】

当科にて 1999～2004 年に MCT (マイクロ波凝固療法) 或いは RFA (ラジオ波焼灼療法) を施行した 33 症例、55 病変を対象とした。

【方法】

治療部位の局所無再発率、治療法別の再発率、再発腫瘍及び非再発腫瘍の腫瘍最大径、主要脈管との位置関係などを *retrospective* に解析し、局所制御としての至適病変について検討した。

【結果】

熱凝固療法が行われた 55 病変中 29 病変(52.7%)に治療部位再発が確認され、3 年局所無再発率は 44.3%であった。ROC 曲線による解析にて、再発の Cut off 値は腫瘍径 1.8cm であり(AUC=0.83)、Cut off 値未満の低値群 (14 病変) については治療部位再発を認めず、3 年局所無再発率は有意に良好であった (低値群 vs. 高値群 : 100% vs. 27.7%, $p<0.0001$)。主要脈管との距離からみた 3 年局所無再発率は、>1cm である遠位群が有意に高かった (近位 vs. 遠位: 33.0% vs. 60.1%, $p=0.0152$)。

【結論】

局所制御能からみた大腸癌肝転移に対する熱凝固療法の至適病変は、直径 1.8cm 未満で、主要脈管から 1cm より遠位の病変であることが示唆された。